



若あゆ



“言葉の大切さ”

校長 浅野 博一

発達途上の子どもたちが、集団生活を過ごしていると、当然、トラブルやもめ事も生じてきます。私たち大人は、子どもの成長の機会であると前向きに捉え、対処してまいりましょう。慶應義塾大学 中室牧子 教授は、著書【「学力」の経済学】で、「誠実さ・忍耐強さ・社交性…は、人から学び獲得するものであり、こうした非認知能力が、人生の成功において極めて重要である」とのシカゴ大学 ヘックマン教授（ノーベル経済学賞 受賞）の言葉を紹介し、【学校とは、ただ単に勉強をする場所ではなく、先生や同級生から多くのことを学び、「非認知能力」を培う場所でもある】と述べています。

また、イーロン・マスク氏が作った学校の人気クラス「シンセシス(総合学習)」のチーフ・エバンジェリストであるアナ・ロレーナ・ファブレカは、著書【The Learning Game】で、【私たちがどんなに頑張ろうと、子供たちに起こる悪いことをすべて防ぐことはできない。彼らの人生をコントロールする力は私たちにはない。時には失敗し、時には苦しむこともある。…困難な状況にさらすことで、子供たちは回復力をつけ、より自立し、自信を持った人間になる。…苦勞をさせることで、人格を形成する機会を与えているのだ。】、また、【大人になって致命的な失敗をしないための最善策は、子供の頃にたくさんの小さな失敗をしておくことだ。】とも述べています。

岸町の子どもたちにも、日々、様々なドラマがあります。学校が学習指導だけにとどまらず、子ども同士のトラブルへの対処や、心の成長を促す指導等、「知・徳・体」を一体的に育てている“日本の教育”は、世界に類を見ないとして、中教審答申では、【日本型学校教育が、世界に誇るべき成果を挙げてくることができたのは、子供のためであればと頑張る教師の献身的な努力によるものである】と明言しています。…岸町小教職員も教育者としての矜持(誇り・プライド)をもち、保護者の皆様と共に力を合わせ、お子さんの成長の支援にあたっています。

さて、さいたま市では、毎年6月を【いじめ撲滅強化月間】と定めています。「いじめ防止対策推進法」には、第二条に、

●「いじめ」とは、…(略)…心理的又は物理的な影響を与える行為(インターネットを通じて行われるものを含む)であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの。

と定義しており、

- * 冷やかしかや、からかい。悪口。嫌なことを言う。
- * 仲間はずれ。無視。
- * 遊ぶふりをしてたたく・ける。
- * 物をかくす・こわす。
- * 携帯電話などで、嫌がることをする。



などは、卑怯な行為であり、決して軽い気持ちで行ってはならないことを肝に銘じなければなりません。心身に苦痛を与えるものは全て「いじめ」であることを、子ども・保護者・学校・地域が共に共通の理解に立ち、「積極的にいじめを認知」し、心を痛める子どもを救い・守り、他者の心身を傷つけてしまい「いじめ」を行ってしまった子どもを正しく諭し導いてまいりましょう。

“言葉”…それは、人に大きな力を与えるものであり、また、時には、人の心を深く傷付けてしまうものです。コロナ禍では、「根拠のないうわさ話」で多くの人が傷付きました。私が高校生だった時に聴いた「シンガーソングライター中島みゆきさんのラジオ番組」のQRコードを掲載します。改めて、ご家庭でも、お子さんと“言葉の大切さ”についてお話合いますようお願い申し上げます。



※こちらのQRコードから進むリンク先ページは、メッセージに掲載していますので、クリックしてぜひご覧ください。